



Be a gift
to the world

2015~2016



藤沢東ロータリー・クラブ週報

- 事務所／藤沢市朝日町 1-6
NTT 藤沢ビル 2 階 TEL 0466-25-4000 FAX 0466-26-9292
- 会長／小柴智彦 幹事／村上進
毎週火曜日 12:30~13:30
- 例会場／湘南クリスタルホテル
藤沢市南藤沢 14-1 TEL 0466-28-2111 FAX0466-28-2126

第 1894 回例会 2015 年 8 月 11 日 (火) (天候) 晴れ No.6

点鐘

開会

ロータリーソング「奉仕の理想」

ゲスト・スピーカー・ビジター紹介

東京財団研究員/学習院大学講師 長尾 賢 様

バナー交換 なし

会食・懇談

-会長報告- 理事会報告

2015~2016 年度・第 2 回理事役員会議事録

開催日 2015 年 8 月 4 日 (火)

開催場所 湘南クリスタルホテル

議長 小柴 智彦 会長

出席者 小柴会長、片岡会員、田中繁会員、入澤
会員、鈴木利雄会員、山口会員、石田会員、田中
正昭会員、林会員

議題

1. 2015-16 年度予算について 継続
2. 藤沢市福祉まつり協賛について 可決
前年度 10,000 円
3. 田中繁会員の出席免除の承認 可決
片岡 啓次 会員の出席免除の承認 可決
4. 水川健太郎会員の事業所名、職業分類の変更に
ついて 可決
- 5 その他
9 月 29 日 (火) 開催のロータリーの夕べに
ついて
会員増強委員会一任。
予算書作成を横田委員長に依頼 可決

-幹事報告-

・会員名簿の校正が来ています。お手数ですが、
今一度回覧の上、了承または訂正依頼のサインを
お願いします。

・2015 年 8 月 22 日 14:00~17:00
地区より、米山奨学セミナーの案内が来ていま
す。土屋理事、河合会員にお送りしています。場
所はアイクロス湘南 6F にて開催されます。
出席が難しい場合は代理を立てて、事務局までご
連絡をお願いします。

-会員&配偶者誕生日-

会員誕生日 なし

配偶者誕生日 なし

-委員会報告-

-スマイル-

【本田 昌子 会員】
先々週のイーail代の例会に参加できず申し訳あ
りませんでした。長尾先生、本日の卓話よろしく
お願いいたします。

【石田 能治 会員】
長尾さん、本日の卓話楽しみにしております。

出席報告

例会月日	総員 (名)	出席 (名)	欠席 (名)	出席率 (%)	メークアップ (名)	修正出席率
7 月 28 日	36 (33)	16	17	48. 48	6	66. 66
8 月 11 日	36 (33)	25	8	75. 75		

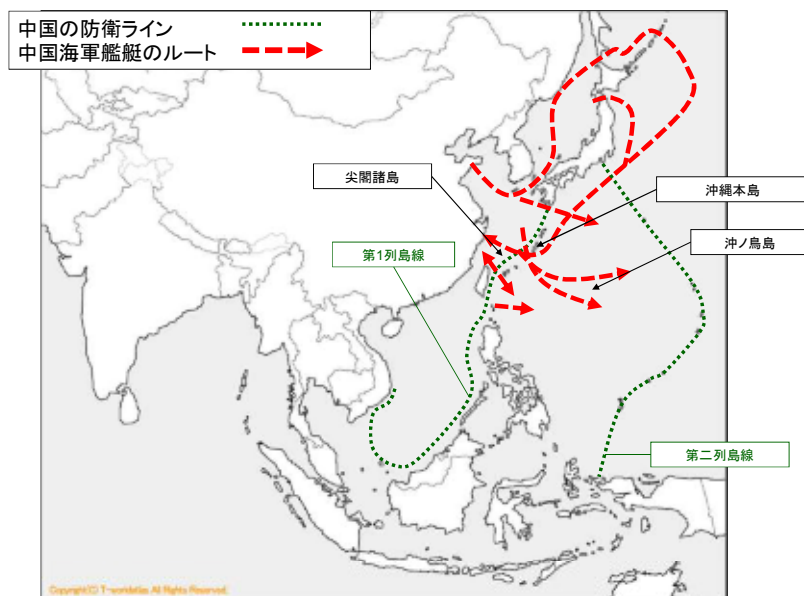
-卓話- 「インドの台頭で日本の安全保障が変わる！」

東京財団研究員、学習院大学講師 長尾 賢 様

昨今、日本とインドの安全保障関係が急速に進展している。実際、日米印、日豪印、日印間で協議や共同演習などが活発になっている。しかし、インドは日本から遠い。飛行機で行けばハワイより遠いくらいである。その遠いインドが日本の安全保障にどうかかわるのだろうか。それを理解するには日本がおかれた安全保障環境の変化、それに日印協力がどのように対応できるのか、考えなくてはならない。

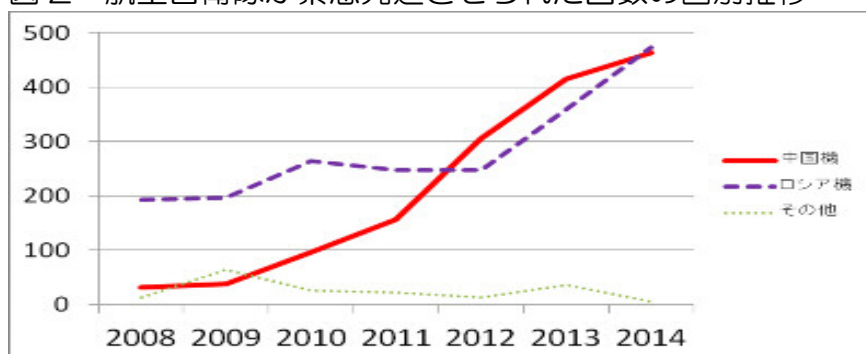
昨今の日本の安全保障環境の変化について考えるとき、中国の問題を避けて通るわけにはいかない。中国の活動は、東シナ海と南シナ海で強引になってきているからだ。東シナ海では尖閣問題やガス田開発などが話題になることが多いが、中国海軍の日本周辺での活動が非常に活発になっている。2004年に中国の原子力潜水艦が領海侵犯して以来、2008年からは東シナ海を超えて太平洋側で演習を開始、2013年には中国の軍艦が日本の周りを一周するようになった(図1)。2014年の中国の新しい「防空識別圏」の設定を見ても、中国に報告していない航空機が通過すれば、戦闘機をあげて確認する措置を掲げており、その内容は領空と同じ扱いになっている。つまり領空を広げようとした行為としてみてよい。中国機が日本の領空に接近する回数も2014年度464回に達し、平均すればほぼ毎日きていることになる(図2)。こうした経緯をみると中国は東シナ海から太平洋側へ活動範囲を広げているものとみられる。

図1：日本周辺における中国海軍の活動範囲



参照：『平成27年度版 日本の防衛 防衛白書2015』（防衛省・自衛隊）44頁を元に筆者作成。

図2：航空自衛隊が緊急発進させられた回数の国別推移



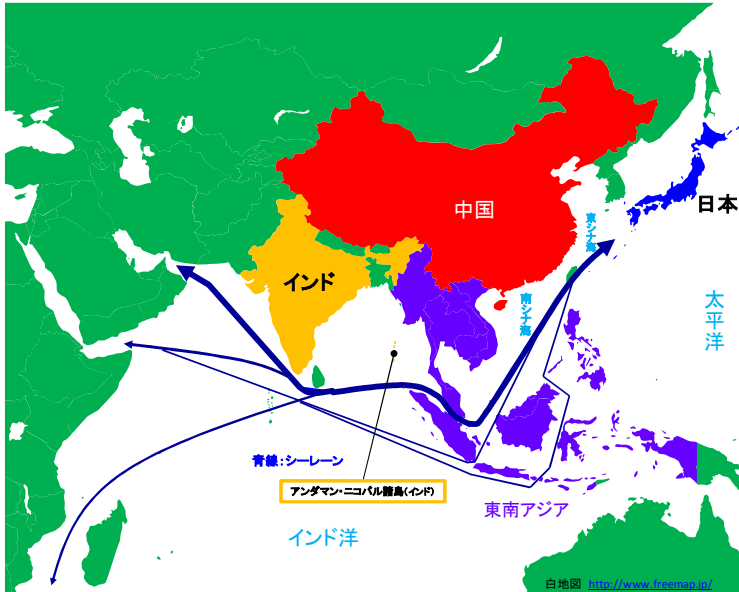
参照：「統合幕僚幹部報道資料 平成26年度の緊急発進実施状況について」（防衛省統合幕僚幹部、平成27年4月15日）

(http://www.mod.go.jp/js/Press/press2015/press_pdf/p20150415_01.pdf)

(平成27年8月17日最終アクセス)

ただ、中国の活動は、日本に対するものは比較的穏やかで、南シナ海においてベトナムやフィリピンに対して行う方はるかに強引である（図3）。ベトナムの船は毎年、中国船に体当たりされて沈められている状態である。南シナ海は、交通の要衝（交差点）で、天然資源が豊富で、大国がおらず、米中に挟まれており、今後、この地域で米中の争いが激しくなることが懸念される。

図3：日本、インド、東南アジア、中国の位置



参照：白地図より筆者作成

ではなぜ中国の行動はこれほど強引になったのか。それは中国の過去の行動をみるとわかる。1974年にベトナム戦争が終わって米軍が引き揚げた時、西沙諸島（パラセル諸島）で南ベトナム軍を攻撃、占領した。1988年にソ連軍がベトナムから引き揚げた時、南沙諸島（スプラトリー諸島）のベトナムが領有していた島々や環礁を攻撃、占領した。1995年に米軍がフィリピンから引き揚げると、南沙諸島のフィリピンが主張している島々を占領した。つまり、中国の行動は、パワーバランスが中国に傾いた時に強引になり、隙間にしみこむ水のように進出してくる特徴がある。だから昨今の中国の行動も、米中のパワーバランスが変わったことに起因するものとみられる。例えば1990年に米海軍は満載排水量3000トン以上の大型の水上戦闘艦を230隻保有していた。しかし現在は98隻、半分以下に減少している。一方、同じ時期に中国海軍は、16隻から41隻へと倍以上に増えているのである。米軍は世界中に分散しており、中国軍はアジアに集中しているから、中国にとって有利な状況になりつつある。

このような状況から、このままアメリカの力が落ち、中国の力が伸び続けると、中国がますます強引になることが予想される。そこで、アメリカの同盟国・友好国が連携して、不足するアメリカの力を補う体制を作ろうとしている。その中で、日印の協力関係に焦点が当たり始めてきたのである。

では日印連携で何ができるのだろうか。少なくとも4つのことができる。1つ目は、日印連携によって、中国の莫大な国防費を東シナ海（日本正面）と印中国境（インド正面）に分散させることができる点だ。そのために日本は今、インドの国境防衛力強化に協力し始めている。道路を造って、インド軍の国境地帯への展開を早めようとしているのだ。

2つ目は、インド洋の安全保障をインドに任せれば、日米は東シナ海や南シナ海の問題に集中できる点だ。米軍が中国に比べ不利なのは、世界に分散しているからである。インド洋をインドに任せれば少し余力が出るはずだ。そのためにはインドの海軍力を向上させなくてはならない。アメリカはインドの空母建造に協力し、日本はインドへ救難飛行艇等の輸出計画を進めている。

3つ目は日印で南シナ海沿岸国を効率よく支援することができる点だ。中国の脅威に直面しているベトナムやフィリピンについて、日本やインドはすでに支援を開始している。日本は哨戒艇や哨戒機を輸出し、海賊対策や自然災害への対応システムなどで支援してきた。インドもベトナム軍の潜水艦部隊や戦闘機の部隊を訓練してきた。日印で役割分担を決めて、より効率的に支援することができるはずだ。すでに日印両国はASEAN諸国に関する日印協議開始で合意している。

ただ、南シナ海では中国の動きが早く、深刻になっているので、日印とも自国軍の存在感を示すようになってきている。例えば昨年、中国側が設置した石油掘削施設をめぐる中越の治安機関の船同士が激しく体当たりを繰り返していた時、日本の艦艇が米豪軍を乗せて訪越した。インド海軍も頻繁に訪越している。こうして存在感を示してベトナムを応援するようにしているのだ。日印はこの点でも時期を調整して連携可能だ。

4つ目として、この他の地域における協力が考えられる。日印は、中国の進出が著しい南太平洋やアフリカにおいても、日豪印協議、日印アフリカ協議などを通じて連携した支援を行っている。人的支援で定評があるインドと、技術支援で定評がある日本の連携は有用だ。同じように、アフガニスタンが再びテロリストの温床にならないようにする支援など、中央アジア対策でも日印は協議を始めている。両国は氷が解け始めて、新しい航路ができ、海底資源開発も進む北極海においても連携する可能性があり、北極政策の調整役を担う北極評議会に参加している。

以上から日印協力の重要性は増していることが分かる。米中のパワーバランスが変わる中、中国は強引になってきている状況に対し、効果が期待できるからだ。この問題は、より身近な例にいかえると、電車の椅子に小さな隙間ができたので、そこにお尻をいれてグイグイと無理やり座ろうとしている人がおり、小さい人や子供がつぶされそうになっている状況といえる。だから、すでに座っている人が協力して隙間を埋めて子供を守ろうという話なのである。つまり、もし中国が礼儀正しく「私も協力しますから、少しあけてくれませんか？」とお願いしてきたら、状況は変わるかもしれない。まだそうはなっていないが、日印の連携が、中国の態度を変えさせるための圧力として効果を上げることを期待したい。

長尾 賢（ながお さとる）



2011年学習院大学大学院政治学研究科博士後期課程修了。博士（政治学）学習院大学東洋文化研究所PD共同研究員、海洋政策研究財団研究員、ワシントンの戦略国際問題研究所(CSIS)客員研究員等をへて、現在、東京財団研究員、学習院大学講師（安全保障論、非常勤）。現在、学習院大学の授業は、大学で最も履修者数の多い授業の一つになっている。フジテレビや読売クォーター、日経ビジネスオンライン、ニューヨークタイムズなどの国内外メディアでもコメント多数。著書『[検証 インドの軍事戦略—緊迫する周辺国とのパワーバランス—](#)』（ミネルヴァ書房、2015年）。

